

## 第170回国際研修に参加して

厚生労働省

東海北陸厚生局麻薬取締部

密輸対策官 山根 正司



### 1 はじめに

平成30年8月22日から9月21日までの間、国連アジア極東犯罪防止研修所（アジ研）で行われた第170回国際研修に参加させていただきました。

今回の研修について感想を述べる機会をいただきましたので、微力ながら、アジ研の素晴らしい活動を広めるとともに、今後の研修参加者の参考にな

ればと思い、自分の経験や感想をお伝えします。

国連アジア極東犯罪防止研修所（UNAFEI（ユナフェイ）又は略称「アジ研」）は、国連と日本政府との協定に基づき、アジア・太平洋地域を中心とする国々の刑事司法行政の健全な発展と相互協力を促進する目的で、昭和36年に設立された国連の地域研修所になります。これまでこの国際研修は東京都府中市に設置された研修所において行われてきましたが、昨年10月、新たに東京都昭島市内の新庁舎に移転することとなり、私達はその新しい研修所で5週間の研修生活を過ごさせていただきました。

研修所内は、国際研修にふさわしい大きなスクリーンが設けられた会議室、栄養バランスの整った食事を提供してくれる食堂、参加者同士が友好を深めるためのラウンジ、卓球ができるトレーニングルーム、い草の香りが心地よい日本の文化を伝えるための和室、宗教を配慮した祈祷室などが備わっており、全ての参加者がストレスを感じることなく楽しく過ごすことができました。



### 2 研修内容について

#### (1) 研修の目的

本研修は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の海外技術協力計画に基づいて、同計画対象諸国及び国内からの参加者を求め、各回の研修において設定された主要課題について検討することにより、日本及びアジア地域を中心とする諸国における犯罪の防止及び刑事司法の充実・発展に寄与するとともに、関係諸国民の相互理解を促進す

ることを目的としており、今回の研修において設定された主要課題は「薬物使用者処遇の実務」でした。

我が国では、覚醒剤の乱用問題が第二次世界大戦後から 70 年あまりもの長きにわたって続いています。薬物事犯で検挙される者のうち覚醒剤で検挙される者の割合は全体の約 8 割を占め、さらに、その再犯者率は 6 割を超える状況にあります。

私が所属する厚生労働省麻薬取締部にあっても、「第五次薬物乱用五か年戦略（平成 30 年 8 月薬物乱用対策推進会議決定）」を総合的な薬物乱用防止対策の観点から推進していくために、特に初犯者等に対する再乱用防止教育及び社会復帰支援を講じていくことが重要であると考えて取り組んでいるところであり、まさに組織が求める重要課題でもありました。



## （２）研修の概要

参加者は、アジア諸国、アフリカ、南米等計 15 カ国から 18 名の海外参加者と、裁判官、検察官、矯正職員、保護観察官などの国内参加者 7 名で構成されており、約 5 週間にわたる研修期間中、前記課題に関して、海外参加者と国内参加者によるプレゼンテーション、国内外の実務者及び専門家による講義、国連職員による講義、保護司宅の訪問、刑事収容施設などの施設見学、グループワークなどを通じて見識を深めるとともに、研修所で寝食を共にする中で友好関係を深めました。

研修内容は、大きく分けて、（ア）参加者全員が主要課題について、自分が所属する国及び分野における現状、問題点及び対策についてプレゼンテーションを行う「個人発表」、（イ）参加者が主要課題に対する知識と理解を深めるための客員専門家、国内講師及びアジア研教官による「専門講義」、（ウ）参加者が主要課題に対する知識と理解を深めるために保護司宅、少年鑑別所、少年院、刑務所、更生保護施設などに赴いて見聞する「研修旅行等」、（エ）参加者が個人発表、講義、施設見学などを通じて学んだ知識と問題点を踏まえ、2つのグループに分かれて実務的な解決方策について探索する「グループワーク」の 4 部で構成されていました。



### （ア）個人発表

研修が始まり、最初の 2 週間は、参加者それぞれによる主要課題に対する個人発表が行われました。

これは参加する参加者それぞれが、自身の職務経験などに基づいて、自国の実情や法制度などを踏ま

えながら、主要課題である「薬物使用者処遇の実務」について発表を行うもので、国内参加者も英語で発表することが義務づけられていたため、英語が得意ではない私にとっては、研修に参加するに当たり、最も頭を抱えるものでした。

私の発表は、作成した原稿をなんとか読み上げることで精一杯でしたが、薬物犯罪捜査に従事する麻薬取締官として、薬物使用が「犯罪」と「病気」の二面性を持つ難しい犯罪であることを前提として、我が国の薬物乱用の歴史、薬物乱用がもたらす害悪、覚醒剤再犯者率が6割を超える問題、薬物乱用の根絶には供給遮断と同時に需要削減が不可欠であることなどについて説明しました。

また、保護観察のつかない執行猶予者に対する再犯防止教育・社会復帰支援の機会が備わっていない我が国の法制上の問題について触れ、その部分を対象とする麻薬取締部の再乱用防止対策プログラムについて紹介をしました。

発表終了後には、捜査機関による再乱用防止プログラムの実施は世界でも珍しい取組であるとして、多くの海外参加者から、共感する声や運用上の問題点に関する質問などが寄せられ、とても充実したものとなりました。



#### (イ) 専門講義

研修前半から中盤にかけて、アジ研の教官による日本の刑事司法制度等についての講義や、国内外の専門家による講義が行われ、その中で世界標準の薬物使用者に対するアセスメント方法やトリートメント方法、近年、米国や欧州等で行われているドラッグコートやハームリダクションなどの仕組みについて学びました。薬物犯罪に対する刑罰の程度は、各国まちまちであり、我が国のように薬物使用を犯罪とする国がある一方で、単純使用について、刑罰の代わりに治療等の代替措置を講じている国も多く存在していることを知りました。

薬物使用は「犯罪」なのか「病気」なのか、薬物使用者に必要なことは「刑罰」なのか「治療」なのか、これは各国の乱用実情、宗教の問題、社会的背景などにも関わることであり、統一した答えを出すことは難しい問題ですが、諸外国の制度や方策について学ぶことによって自身の視野を広げることができたと感じています。



#### (ウ) 研修旅行等

研修期間中には、保護司宅訪問や広島・京都への研修旅行などが行われました。研修旅行として、少年鑑別所、刑務所、少年院、更生保護施設などを見

学して、日本の矯正保護制度について直接見て学びました。保護司宅訪問は、海外参加者が主体となって、直接保護司のお宅を訪ねて意見交換を行うというもので、海外参加者はボランティアとして地域で更生復帰に情熱をもって取り組む保護司の方々の姿勢に感銘を受けていました。

私自身、不勉強だったのですが、この保護司制度を持っている国はまだ少ないようで、海外参加者達は自国に持ち帰って紹介したいと賞賛し、日本人として誇りに感じると同時に、保護司制度の素晴らしさ、保護司の方々の有り難さを再認識しました。

また、広島では平和記念公園、京都では清水寺、金閣寺に立ち寄り、海外参加者は日本の文化や歴史などについても学びました。

広島で立ち寄った平和記念公園では、原爆資料館などを見学し、世界で唯一の被爆国である日本の悲しい歴史と平和の大切さを共有しあいました。



#### (エ) グループワーク

研修後半には、参加者が2つのグループに別れ、大詰めとなるグループワークが行われました。

グループワークは、メンバーそれぞれの職務上の経験、研修中の個人発表や専門家講師の講義などから習得した知識などを前提に、与えられたテーマについてグループメンバーで議論してベストプラクティスを導き、最終的にそれをレポートにまとめて代表者が発表するというものです。

我々のグループに与えられたテーマは「施設内における処遇方法、施設と地域コミュニティの協力関係」というもので、議長を中心に各国の実情、問題、有効な方策について発表し合いレポートをまとめていきました。

語学力の乏しい私にとって、英語での議論に加わることはハードルの高いことでしたが、議長が全員参加をモットーに進行してくれ、自分を含め、メンバー全員が平等に議論へ参加することができました。

また、グループワークを進めていく中で、気付かないうちにメンバー同士の団結力が芽生えていき、メールを使ってメンバー間で情報共有をしたり、夜にみんなで図書室に集まって共同作業をしたり、拙い英語力の私でさえ、いつしか全員で1つのレポートを仕上げている楽しさに引き込まれていき、発表後にはみんなで喜びを分かち合うことができました。



#### 4 研修を終えて

英語力の乏しい私にとって、海外参加者と長期間

にわたり共同生活を送る英語漬けの生活は未知の領域であり、研修が近づくにつれ、不安と緊張で胃が痛くなる毎日でした。しかし、実際に研修が始まってみると、これまでに紹介したプログラム以外にも、歓迎会、富士山観光ツアー、国内参加者企画による浅草観光ツアー、卓球大会、海外参加者のための日本語教室、バーベキュー、各種パーティーなど海外参加者とコミュニケーションを図る機会がたくさんあり、片言の英語ながら、海外参加者と身振り手振りで意思疎通が図れるようになっていきました。

また、海外参加者を対象とした日本語教室が始まってからは、参加者活の中で不思議な日本語が飛び交うようになり、毎日の生活を愉快的なものにしてくれました。

そして、研修終盤を迎える頃には、1人で海外参加者と一緒に買い物に出掛けたり、夕飯を食べに出掛けたり、散髪に付き合ったり、参加者の誕生日を祝うサプライズを企画したり、恋の悩み相談?!を受けたりするほどの親しい関係になり、いつしか、かけがえのない家族のような存在になっていました。

参加者は、世界中の様々な国から集まっており、言語、文化、宗教、食事、生活など様々な違いがありましたが、全員が常に明るく、笑顔でお互いを尊重し合える優しく、頼もしく、そして愉快的な最高のメンバーでした。



## 5 おわりに

今回の国際研修で過ごした日々は、私のこれまでの人生において、何物にも代えがたい貴重な時間となったことは間違いありません。

そして、研修で知り合えた仲間は、私にとって何よりの財産であり、私の誇りといえます。

参加者同士で作った SNS のグループは今も大活躍しており、お互いの近況を知らせるメッセージが毎日のように交わされ、アジ研によって結ばれた参加者同士の絆は今も国境を越えて続いています。

アジ研は、業務に関係した知識を習得するだけの研修ではなく、同じ職域で働く国を超えた“生涯の仲間”に巡り合わせてくれる最高の研修ですので、興味のある方は参加されることをお勧めします。

最後になりますが、このような素晴らしく貴重な時間を私に与えてくださいましたアジ研の所長をはじめ教官の皆様方に心から感謝を申し上げます。

ありがとうございました。